Rainbow letter

日本周産期メンタルヘルス学会・ニュースレター

2022.1
No. 27

第17回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会　開催報告

大会長　笠井靖代　日本赤十字社医療センター　第二産婦人科部長

「一人ひとりの妊娠・出産・育児～母子の視点から考える～」をテーマとして、2021年10月23日（土）24日（日）に日本赤十字社医療センターを会場にWEB開催をいたしました。オンデマンド配信のプログラムと当日のライブのプログラムを合わせて11月30日まで延長して配信し、合わせて1027名の方に登録・視聴いただくことができました。またポスター発表は53演題の応募があり、プログラム委員会・倫理委員会の先生のご協力により全ての演題を登録・発表していただくことができました。

特別講演では、尾仲達史自治医大教授にオキシトシン研究の最前線について、佐藤摩利子国連人口基金駐日事務所所長に世界人口白書2021「からだの自己決定権」についてお話しいただきました。３つのシンポジウムでは「産後ケア・地域連携」「出産体験」「母親にとって実効性のある支援」について様々な立場から議論いただきました。また精神疾患基礎講座では、本学会の理事・役員の先生を中心にわかりやすい解説をいただきました。共催セミナーも３演題をお願いすることができました。そして何よりも今回、岡野賞として最優秀演題賞を創設し、第1回の受賞者を滋賀医大　辻俊一郎先生の演題に決定することができました。多職種での取り組みであり、本学会に相応しい内容であった思われます。

学術集会の開催は当初2020年10月でしたが、COVID19の感染拡大のため同年5月の連休前に延期を決定し、その後も開催までには何度も感染の波が押し寄せ、特に準備の佳境に入った2021年8月にはオリンピック以外の全ての行事が中止となりました。本業である病院の診療と並行しながらの学術集会の準備となり、至らぬ点も多々あったと思いますが、ご容赦いただければと存じます。そのような状況下にあっても学術集会のために演題を応募いただいた先生方、座長・演者を引き受けて下さった先生方、岡野賞審査委員の先生方、プログラム委員会・倫理委員会の先生方、学術集会を様々な面で支えて盛会に導いていただきました全ての学会員の先生方に熱く御礼申し上げます。

2022年、群馬大学常盤洋子先生を大会長として開催される第18回大会では、皆様とお目にかかって交流することを願わずにはいられません。

学術集会・シンポジウム参加報告

第34回日本総合病院精神医学会総会

2021年11月19日～20日Web開催にて、岡島美朗（自治医大さいたま医療センター）・菊地紗耶（東北大）両先生座長のもと、「精神疾患合併妊産婦を支える多職種間コミュニケーションの「コツ」」と題したシンポジウムが開催されました。

初めに私須田から、周産期におけるリエゾン精神科医の動きについて全体の見取り図を提示しました。続いて清野仁美先生（兵庫医大）からは精神科医の見立てを多職種連携の中でどのように伝え支援に繋げていくかについて、根本清貴先生（筑波大）からは共通言語としてのEPDSを有効活用することや具体的かつ持続可能なカンファレンスの開催についてご講演頂きました。宮田郁先生（大阪医薬大）からは、リエゾンナースの具体的活動および薬剤情報提供をはじめとした多職種連携システムへの有機的な関わりについてご紹介頂きました。安田貴昭先生（埼玉医大総合医療センター）からは「リエゾン的な関わり」について分かりやすく整理して頂いた上で、それを地域医療にまで発展させていく将来的な方向性についてご提示頂きました。最後に指定発言として竹内崇先生（東京医歯大）から、周産期メンタルヘルスに関わる諸問題に対し総合病院精神科がより主体的に取り組んで行く必要性、そのための啓発についてお話頂きました。

本シンポジウムは同学会の周産期メンタルヘルス委員会立ち上げ後初の企画でした。私自身、各先生のご講演から改めて学んだこと、刺激を受けたことが多く、手前味噌ではありますが非常に充実した内容であったと感じています。実際、朝早くのセッションで視聴者の数に戦々恐々としておりましたが、蓋を開けてみれば大変多くの方にご覧頂けました。後日のオンデマンド配信も含め、総合病院精神科の中で周産期メンタルヘルスへの関心が一層高まる結果になればと思います。

（評議員/須田哲史/国家公務員共済組合連合会立川病院精神神経科）

企画・発行：日本周産期メンタルヘルス学会　情報関連委員会

当学会では会員の皆様にとって有用な情報をニュースレターで取り上げていきます。
ご意見やご要望がありましたら事務局までお知らせください。